陳舜臣さんを語る会通信

NO.141　Jul.　2025

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2025年7月1日

谷口利一著『使徒たちよ 眠れ 神戸外国人墓地物語』紹介

５月25日の午後、神戸市の主催する「神戸市立外国人墓地見学会」に参加した。見学会に参加し、神戸の近代史は神戸外国人墓地を抜きにして語れないと強く感じました。陳舜臣作品の舞台にもなっておりますので、谷口利一著『使徒たちよ 眠れ 神戸外国人墓地物語』(1986 のじぎく文庫)を紹介いたします。

著者紹介『使徒たちよ 眠れ』「あとがきに代えて」より抜粋引用

谷口さんは、大正五年五月二十四日、三田市生まれ。

終戦後すぐの二十年十月、神戸消費組合入り。神戸外国人墓地の管理事務所に勤務し始めるのは二十六年十一月から。小野浜、春日野墓地から再度山修法ヶ原への改埋移転がすみ、新墓地が開設したのとほぼ同時だ。当時の職名にしたがえば、神戸市衛生局庶務課員。のちに土木局施設課員と変わるが、…、外国人墓地の管理人として園内の維持管理はもちろんのこと、外国からの墓参者や埋葬者の家族、友人の案内、世話を三十年にわたって続けられた。…。

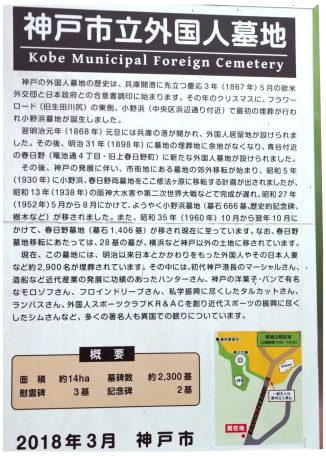
谷口さんが再度山上の管理事務所に住み込んで働き始めたころは、電気、ガス、水道が通っていなかったし、現在のようにバスもなかった。井戸で水を汲み、買い物をするのもリュックを背負い、市街地まで歩いて往復したという。

五十五年八月末に定年退職。神戸電鉄鈴蘭台駅近くの自宅で、在職中からコツコツと集めた外国人墓地に関する資料の整理や原稿書きを始めている。…。

■谷口利一氏は、昭和五十九年十一月、『使徒たちよ…』出版前に急性肺炎で亡くなられました。享年六十八歳。

神戸市立外国人墓地 解説

墓地入口近くにある説明板の記述です。



神戸の外国人墓地の歴史は、兵庫開港に先立つ慶応３年（1867年）５月の欧米外交団と日本政府との合意書調印に始まります。その年のクリスマスに、フラワーロード（旧生田川尻）の東側、小野浜（中央区浜辺通り付近）で最初の埋葬が行われ小野浜墓地が誕生しました。

翌明治元年（1868年）元旦には兵庫の港が開かれ、外国人居留地が設けられました。その後、明治31年（1898年）に墓地の埋葬地に余地がなくなり、青谷付近の春日野（篭池通４丁目・旧上春日野町）に新たな外国人墓地が設けられました。

その後、神戸の発展に伴い、市街地にある墓地の郊外移転が始まり、昭和５年（1930年）に小野浜、春日野両墓地をここ修法ヶ原に移転する計画が出されましたが、昭和13年（1938年）の阪神大水害や第二次世界大戦などで完成が遅れ、昭和27年（1952年）５月から８月にかけて、ようやく小野浜墓地（墓石666基、歴史記念碑、樹木など）が移されました。また、昭和35年（1960年）10月から翌年10月にかけて、春日野墓地（墓石1,406基）が移され現在に至っています。なお、春日野墓地移転にあたっては、28基の墓が横浜など神戸以外の土地に移されています。

現在、この墓地には、明治以来日本とかかわりをもった外国人やその日本人妻など約2,900名が埋葬されています。その中には、初代神戸港長のマーシャルさん、造船など近代産業の発展に功績のあったハンターさん、神戸の洋菓子・パンで有名なモロゾフさん、フロインドリーブさん、私学振興に尽くしたタルカットさん、ランバスさん、外国人スポーツクラブＫＲ＆ＡＣを創り近代スポーツの振興に尽くしたシムさんなど、多くの著名人も異国での眠りについています。

神戸市立外国人墓地見学会は年6日、12回

「神戸市では、神戸の歴史とともに歩んできた外国人墓地を、歴史的遺産として多くの人々に知っていただくために、毎年4月から6月、9月から11月の第4日曜日に無料で公開しています」ということです。（写真撮影できる墓地、慰霊碑はごく一部）

今年だと、4月27日、5月25日、6月22日、9月28日、10月26日、11月23日ということになります。そして、午前の部と午後の部がありますから、年間12回で、募集人数は各回、30名です。

『孔雀の道』に描かれた外国人墓地

『孔雀の道』に描かれた外国人墓地

『孔雀の道』は陳舜臣さんの初めての新聞小説で、神戸新聞に、昭和43年5月12日から12月31日まで連載されました。

連載予告に載った作者のことば

これは一人の若い混血の女性が、母親の人生遍歴のあとをたどる物語りです。彼女は母への共鳴と反発を織りまぜてひたすら自分の道を進みます。過去と現在の間にはむなしい空白ではなく、密度の濃い時間が詰まっていました。母孔雀の通った道に、はたして何が落ちていたか？

登場人物

●**ローズ・ギルモア**　主人公、27歳。父は英国人、二年前に死亡。母は日本人、終戦の翌年、ローズが5歳のとき焼死。イギリスの大学でアジアの近代史を専攻した学者。少女時代までを過ごした日本に、女子大の英語教師として13年ぶりに帰国。

●**中垣照道**　元、京都の、ある仏教系の高校の教師。30歳。実家は信州の田舎の仏寺。父は健在。仏教研究のため、一年あまりインドで暮らしての帰路。船上で、ローズ・ギルモアと知り合う。「ほんとうのママの姿を知りたい」という彼女に惹かれ頼られ行動をともにする。

●**ランポール夫人**　中垣が船上で知り合ったもう一人の女性。五十をすぎたと言うが若く見える。アメリカ人実業家を夫に持つ日本人。

●**立花康子**　ローズ・ギルモアの叔母(母の妹)。

『孔雀の道』の記述から

ローズ・ギルモア、立花康子、中垣照道の三人が、外国人墓地にあるローズの母の墓に参る場面を抜粋・引用します。

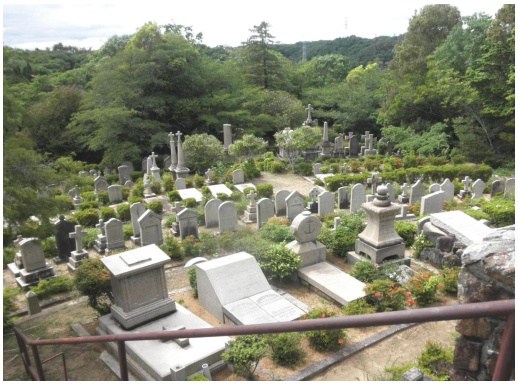
再度山ドライブ・ウエイの入口は、移住センターの西にある。

移住センターを右に見てしばらく行くと、急カーブがあり、そのさきにトンネルがある。

その短いトンネルを出ると、あっという間に山にはいってしまったかんじがする。

ドライブ・ウエイの入口から、修法ヶ原までは、約二十分の道のりである。左手に大竜寺の朱塗りの山門がみえると、ほどなく修法ヶ原に達する。

赤松に囲まれて、水の澄んだ広い池がそこにある。その池を右にみて、数百メートル行くと、外人墓地の入口の鉄柵がみえる。



外国人墓地風景

ひろびろとした墓地で、しかもローズは母の墓の所在を知らない。管理人に案内してもらうほかはなかった。

チャペルの前に、翼をつけた天使が、木の枝をかざしている像が立っていた。これは第一次大戦中に、神戸から出征して戦没した十九名の外人を記念するために立てられた碑である。…。

「ここです」

と言って、管理人が立ちどまった。

上部が弧をえがいている低い墓石があり、十字架の下に、

HISAKO GILMORE

と刻られてあった。

そのまえに花束が置かれている。

ローズは抱えてきた花束を、もとから置いてあった花束の横にならべた。二つともバラだった。(双葉文庫版p.376-380)

■このあと、結末に、外国人墓地の場面がもう一度出てきます。ここにランポール夫人が登場します。推理小説ですので、この場面にはふれません。是非ご一読を。

十九名の戦没者慰霊の碑

■右の写真を撮るのが一番の目的だった。墓地内、撮影可になった箇所はごく一部だったので心配していたが、この、チャペル前の慰霊の碑は、厳密には、墓地入口の、門の鉄柵の外だったので、自由に撮影できた。

『使徒たちよ 眠れ　神戸外国人墓地物語』に描かれた人びと

「ラムネ誕生」p.61～74

明治十七、八年頃、外国人居留地十八番館のカメロン商会が売り出した清涼飲料水「十八番ラムネ」が爆発的な人気を呼んだ。

ラムネは、英語のレモネードが日本語になまったもので、レモンのエード、つまり炭酸レモン水のことである。このヨーロッパ産の清涼飲料水に目をつけたのが、十八番館の主アレキサンダー・カメロン・シム。彼は、レッテルに菱形の帆前船をデザインするなど日本人の感覚に合わせた工夫をこらし、京阪神市場で大当たりさせる。

「十八番ラムネ」のレッテル

■コレラは、明治10年（1877）に西南戦争から兵庫港に帰還した兵士の感染をきっかけに神戸市内でも発生が確認され、以来数年、毎年のように神戸のまちを襲った。

このコレラの流行と「十八番ラムネ」の売れ行きが大いに関係した。詳しくは是非、ご一読を。

東遊園地に残るシムの碑　この章、2枚の画像は　ウエブサイト seitar0.exblog.jp 掲載のものを使わせていただきました

■また、宝塚で炭酸鉱泉を発見したJ・C・クリフォード・ウイルキンソンも外国人墓地に眠っています。

「慰めの婦人」p.103～116

六甲全山につつじの花が咲き乱れる五月半ば。その花の列を縫って、毎年、女子学生の一団が貸し切りバスで再度山修法ヶ原の外国人墓地さして登ってくる。

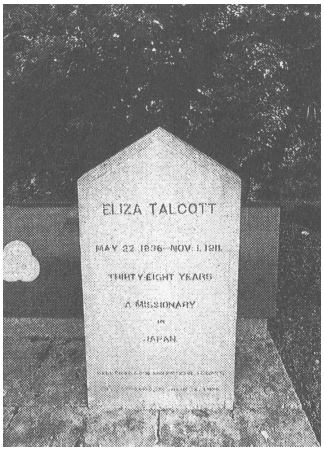
正門から約二百メートル。十一区六番一号の墓籍番号がふられた区画に集合すると、彼女たちは敬虔な祈りを捧げる。

墓碑に刻まれた名は、イライザ・タルカット。日本に来た最初の婦人宣教師で、神戸女学院生みの親でもある。

この日は女学院創立記念日で、墓地礼拝は新入生による伝統行事だが、式後も学生の多くは、しばらく墓前を離れない。花を供え、瞑目する者もある。

その〝聖女〟タルカットが、豊かな亜麻色の髪を潮風になびかせてジュリア・ダッドレーと共に神戸上陸第一歩を記したのは、明治六年（一八七三年）三月三十一日だった。

二人を日本に送り込んだのは、アメリカン・ミッション・ボードというプロテスタント系のキリスト教団体である。…。



タルカット女史の墓碑（同著より）

「一粒の麦」p.117～130

一粒の麦とは、明治十九年（一八八六年）、南メソジスト教会のアメリカ人宣教師ジェームズ・ウィリアム・ランバスと長男のウォルター・ラッセル・ランバス父子が、「読書館」として自宅を開放して始めた教育伝道を指します。

（父子の自宅とは）現在の大丸神戸店東側の筋、三宮神社を南へ下り、海に向かって左手の二軒目。旧神戸外国人居留地四十七番館。

良家のお嬢さんとおぼしき女性が、人目を忍ぶようにうつむきかげんに玄関をくぐっていく。前垂れを手に巻き取りつつ、丈の短い着物姿で駆け込んで来るのは、どうやら米屋のでっちどんらしい。学生、書生も混じっている。集まってくる階層はさまざまだが、手には決まって分厚い聖書とナショナルリーダーを携えていた。

読書館はのちにパルモア学院として発展し、さらには関西学院の創立など、父子は大きな足跡を残していく。

■また、現在の栄光教会（下山手通四丁目兵庫県庁前）の基礎をつくったのもジェームズ・ウィリアム・ランバスです。

栄光教会のホームページより↓

『使徒たちよ 眠れ　神戸外国人墓地物語』に描かれた人びと（続）

「一発の銃弾」p.169～181

第一次世界大戦を引き起こしたのは、実はたった一発の銃弾である。発端となった場所は、バルカン半島のセルビア。この旧王国の首都サラエボの一青年が、オーストリア・ハンガリー皇太子夫妻に向けて引き金をひき、暗殺してしまったのだ。

阪神間在住のイギリス、フランス人などの表情は固かった。母国が連合国軍に加わったために、極東日本にいた青年たちにも次々と召集令状が届いていたからだ。

日本から出征した外国人青年の数はわからない。それらしい記録は見当たらず、彼らが参加した戦線も不明だ。ただ一つだけはっきりしていることは、阪神間から連合国軍兵士として出征した十九人の青年が戦死している事実である。

再度山修法ヶ原の外国人墓地正門を入ってすぐ左手。小高い丘の上にそびえるモナリザの像が、還って来なかった十九人の慰霊塔である。御影石の台座に刻まれた十九人の名前は、風雨にさらされてすっかり読みにくくなっている。

上から十番目にケネス・ジョイス・ネルソン・ハンセルの名が刻んである。神戸に数多くの洋風建築を残した、あのイギリス人建築家ハンセルの一人息子である。

「造船パイオニア」p.143～155

この章ではエドワード・チャールス・キルビーとエドワード・ハズレット・ハンターを取り上げているが、ここでは後者についてのみふれます。

ハンターは、イギリス人実業家で範多財閥・大阪鐵工所（日立造船〈現：カナデビア〉の前身）の創業者で、造船業を中心に産業育成を通じて日本の近代化に尽力した人物として著名である。また、その居宅、北野町にあったハンター邸は現在、「旧ハンター住宅」として王子公園に移り、国の重要文化財に指定されている。下の画像。

wikipediaより↓

その他の人びと

ふれたかったが、紙幅の都合で割愛した人物を略述します。

●塩屋の〝異人館山〟と呼ばれたジェームス山の開発者として知られるイギリス人貿易商、アーネスト・ウィリアム・ジェームス。

●モロゾフ製菓の初代社長、F・D・モロゾフ。

●NHK朝の連続ドラマ「風見鶏」のモデルとなったハインリッヒ・フロインドリーブ。

■前ページに、十八番館、四十七番館など、居留地の地番についての記述があります。このページで言及したハンターも、二十九番館で「ハンター商会」を興します。これらの場所について、左の地図で確認して下さい。

田井玲子著『外国人居留地と神戸』より転載